

それでも冬季演習のとき、日本の移民団の家庭を訪問して、ペーチカで暖まりながら話し合う楽しい一時もあったことを思い出します。

虎林に来てから二年半、昭和十八年十二月十一日、山砲第五十五連隊補充隊に転属のため虎林を出発し、十二月十八日善通寺第五十五連隊補充隊に到着、同日第九中隊に配属となり、十二月二十四日付をもって召集が解除された。

上海敵前上陸の実戦と 満州の関特演訓練

愛媛県 平井秀利

私は大正四年生まれで、昭和十年徴収で、第一乙種だったが、支那事変が始まると直ぐ、十二年八月に召集になりました。十一師団の歩兵は、丸亀・松山・徳島・高知ですが、司令部と特科隊（騎・砲・工・輜重など）は全部善通寺です。

上海戦に参加するために、十一師団が動員されたわけで、上海派遣軍として敵前上陸したのですが、輜重が上陸したときはもう弾丸が飛んできました。特に大場鎮や羅店鎮あたりは戦線が膠着状態で、輜重は前線に荷物を運ぶことが出来ないので夜運びました。作戦中は雨が降っていたが昼は動けん。

しかし、大場鎮（肉弾三勇士で有名）、羅店鎮、嘉定が陥ちるまでは苦戦だったが、追撃戦は比較的早かったです。蘇州―無錫と行ったが、蘇州は私たちが行った時はもう陥ちていました。

そして上海に戻ったのですが、そのころは日本商店が帰ってきて、居留民が出迎えてくれました。ところが十二月だというのに、我々には夏の軍服や蚊帳が支給されました。私ははじめから、南方へ行くという噂を聞いて、呉淞で乗船したが、結局は高雄港の南の海岸に上陸した。そこで約三か月間ぐらい待機していたわけですが、昭和十三年三月の下旬、高雄港を出港して坂出に上陸し、三月二十八日ごろだと思いますが召集解除されたわけです。

上海戦は短期間であったが、輜重兵もみんな戦った。

第十一師団の人たちは一つの行動、四国の連中は同一行動をとった。中支は短い期間であったけれど、食う物がない、輜重隊でも栄養失調だ夜盲症患者も出た。副食もない。徴発した玄米を食べ、別の部隊の豚肉を買ったりしたか、調味料は塩だけ。煙草もないので新聞紙で巻いて吸うという苦勞が今でも思い出されます。

昭和十六年の七月十六日召集で、満州の虎林で、山砲二五一部隊として、関東軍特別大演習（関特演）の名目で戦時防衛勤務に服したのです。

当時の編成は、現役兵と召集を併せての部隊で、直接の教育訓練等は、主として現役下士官があたり、内務班でも激しい粗暴な私的制裁が横行していました。

兵の態度が悪い、行動も鈍い、服装が、掃除が、整理整頓が、銃剣の手入れが悪い等々、ことごとに、なぐる、ける、竹刀や棒で打つなど、日常茶飯のことでありました。

日常は起床から就寝まで詳細に決められており、兵は下士官の監視のもとで、瞬時も気を抜くことができません、

分刻みの内務生活を強いられておった。

なお、実習訓練等も計画通り厳しく、暴力的な制裁のもとで強行されることが多かった。また、砲兵隊として、弾薬補給、輸送部隊として、常時、軍馬、駄馬を保有しているため、馬匹の飼育、訓練等の業務が日常、兵の重い負担となっていたのです。

いろいろの内務班の行事、雑用使役、訓練、軍馬の伴う演習等で、兵隊は時間的な休養はほとんど認められず、身辺整理や着衣類の洗濯など思うに任せません。また、兵官の設備が不十分で、入浴など週に一回で短時間の行水程度しかできない有様です。従って、兵はノミ、しらみを殖かす不衛生な状況でもありました。

部隊の食糧供与も不足勝ちで、兵舎にいながらも麦飯の糧が少量の割当となり、兵は訓練活動の重労働と重なって、空腹に耐えられず、馬糧（馬の食料）として支給される大豆の油紋糟玉（輪型に固めた三〇キ程のもので、内地では細かく砕いて、普通稲作の肥料として使用していた。いわゆる豆粕）を、馬舎（厩）掃除や馬舎当番の時に、破碎して兵舎に持ち帰り、生で囓んだり、飯

盒で炊いたりして飢えをしのぐ兵が数多くでてくる始末でありました。

また、食器洗場で、水溜まりに流れ残りの米粒を拾い集めて食う新兵の姿を見せつけられる時期もあったほどです。

訓練の厳しさは、実戦の時に役立つものですが、内務班での私的制裁は厳しく禁じられていたはずですが、質の悪い古参兵などは、初年兵をいじめることを日課にしていたようでした。

この悪習が次から次へと申し送られたわけですが。これは、戦友愛を強くするものではなく、かえって反発を強くして、団結を弱めていった場合が多かったと思います。戦闘で苦しむのではなく、内務班の馬鹿げた制裁で辛い思いをした初年兵も多かったことでしょう。

私たちは、上海で実戦の経験を持ったので、いざとなれば上性骨はできていたから、何とかしのぎながら召集解除になりました。

満州最北端 三年三か月の苦しみ

山梨県 末木定松

私は大正八年七月九日生まれ、昭和十五年一月十日、東京・世田谷の東部十三部隊野砲兵隊に現役兵として入営しました。

一週間は注射、注射の毎日で、一月十八日品川駅から軍用列車に乗ったが行先は分かりません。静岡の大火の翌日だったと思いますが、あちこちの残り火の煙を見ながら、名古屋―下関―釜山―満州国黒河省孫吳に到着、さらに待っていたトラックに乗り、山道を一時間ぐらい走り、満州国最北端の法別拉陣地に到着したのは一月二十五日の夜半だったと記憶しています。

その陣地は、高い山の稜線が延々とつづき、そこに横穴が掘ってあって、眼下は黒龍江、河幅五、六〇〇呎という地形でした。

それから初年兵教育が始まりました。零下三〇度とい